ミナミハンドウイルカの腹部斑点における成長依存的変化

°八木原風・酒井麻衣(近大農)・小木万布(御蔵島観光協会)

【背景・目的】ミナミハンドウイルカは成長に伴い腹部に斑点を形成する。調査地である東京都御蔵島には本種の個体群があり、1994 年から 25 年間にわたり個体識別調査が実施されている。同調査は個体識別に自然標識を利用しており、出生年の記録から年齢が明らかである。しかし、本種が 35-40 齢という長い寿命を持つのに対して観察年数が少ないことや、出生から継続して観察ができなかった個体がいるため、過去 25 年間の観察個体約 275 頭のうち 53%の年齢は不明である。そこで本研究ではミナミハンドウイルカの年齢と腹部斑点の密度や量との関係性を調べ、外部形態指標を用いた非侵襲的な年齢推定方法の確立を目指した。
【方法】1994 年から 2019 年の間に識別され、継続観察により年齢情報が参照できる 101 個体と継続観察記録は存在するが年齢情報が不明の 57 個体を対象に観察を行なった。イルカを水中ビデオ撮影し、近接した個体を切り出した静止画を観察に用いた。鯨体の内、斑点が現れる白色部について 18 区画に分けて観察を行なった。斑点の密度と量をそれぞれ 4 段階に分けて各体区画を評価した。
【結果】斑点は平均 7.1 齢で腹側の生殖孔付近を中心に形成され、加齢に伴い吻端方向と体側方向に分布を拡大することが明らかになった。さらに、斑点の密度と大きさについても加齢に伴いそれぞれ増加・大型化することが明らかになった。各個体の加齢に伴う斑点の分布や評価値の変動は概ね一貫しており、年齢形質として有用であることが示唆された。